

イラン国とイスラム教の司令官、イラン・イスラム共和国イスラム革命防衛隊ゴドス部隊司令官、シャヒード・ガーセム・ソレイマーニー氏が、娘ファーテメへ書いた生の哲学、ジハード及び弱き者や恐怖に脅かされている子供達についての手紙. . .

『慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において』

これが私の最後の旅になるのか、運命はそれとは異なるのか、何がどうであれ神の導きであれば、私はそれが正しいと思う。私がいなくて寂しい間、お前にとって思い出となるよう、旅の道中でこの手紙をお前の為を書く。もしかしたら、中にはためになることが書いてあるかもしれないな。

旅を始める度に、皆にもう会えないのではと思う。道中では幾度もお前達一人一人の優しさあふれる笑顔を読み出し、幾度も涙を流してきた。皆が恋しい、神のご加護がありますように。あまりやさしく振舞う時間がなく、君達に対する自分の内なる愛を伝えることはできていないが。でも、一度でも誰かが鏡に向かって、自分の瞳を見つめながら“愛している”など言っている事を見たことがあるかい？滅多にないだろうが、その人にとってはその瞳が世界で一番大事なもののなのであろう。あなた達は私の瞳なのだよ。言葉にしなくても、それは揺ぎ無いことなんだ。君達に心配をかけて20年以上が経って、神は未だにこの命が尽きるような運命は施されてなく、あなた達を悪夢からは解放させてくれないようだ。娘よ、お前達の心配を少なくする為に別の事をやろうと幾度も考えてきた。しかし無理だった。これは私が今も昔も軍事に興味があるわけではない。仕事の為でもない。誰かの頼みや強制でもない。娘よ、私は仕事、使命、お願い事や強制の為に一瞬たりともお前達に心配をかけたくない。そんな事の為に君たちを泣かせたり、除外するなんて以ての外だ。

* 私はこの世で誰もが自身の為に異なる道を選んできたのを見てきた。ある人は科学を学び、ある人は科学を教える。ある人は商売し、ある人は農業をしたり、何百万という道、もしくは人間一人につき、一つの道があり、皆自分の道を選んできたのだ。私はどの道を選ぶべきかを考えたんだ。自分と向き合ってみて考え、いくつもの事を把握し、自分にこの道はどれほどのものか、終着点はどこか、私にはどれほどの時間があるかを問いかけた。そして、最後には根本的に私の目標は何なのかと。私は自身の命に限りがあり、皆も同じなのだと思う。皆、
いくばく幾何の歳月を経て、去っていく。ある人は数年、ある人は数十年、しかし100年も生きる人は

そう多くない。皆、いつかは去り、一時的なものに過ぎない。商売をすれば、最後には少しの金貨と家と車が手に入るだろうと思った。しかし、これらはこの道での私の運命において何の影響もない。*あなた達の為に生きようと思った。どれほど君たちが私にとってかけがえのない存在なのかがわかった。それは、もしも、あなた達に何か良きなきことが起こったら、私の全身は苦痛に見舞われるだろう。もしも、あなた達に何か問題が起これば、私は全身が焦がされるような感覚に陥るだろう。もしも、あなた達がいつの日か私の元を去ってしまったら、私は朽ち果てるだろう。しかし、どうすればこの恐怖と心配に打ち勝つことができるのかと思った。そして、その為には私の恐怖を克服してくれる者に助けを求めるべきだと思い、それは神以外にはなかった。お前たちが私にとってかけがえのない人たちで、その価値と重さは財力や権力では守ることができないものなのだ。もしそうでなければ、財力に恵まれている人達や権力をもっている人達は、自身の死を無くすか、財力と権力で、不治の病を無くし、老後には寝たきりなる事を阻止するだろう。私は神を選び、彼の道を選んだ。この事について告白するのは、初めてだ。．．．私は決して軍人になりたくなかった、決して天秤にかけられる事を好んではいなかった。私はあの殉教した民兵の純粋な口から出た「ガーセム」という美しい名を何物とも変えたくはない。私はただの「ガーセム」で、それ以上でもそれ以下でもありたくない。なので、墓にはただ「兵士 ガーセム」と書いてほしいと遺言した。偉大な名に聞こえてしまうガーセム・ソレイマーニーではなく。

*愛しき娘よ、神から私の全身を彼の愛で満たすようにとお願いした。*私の全てを彼の愛で満たすようにと。人を殺めるためこの道を選んだわけではない、私が鶏をさばく光景すら見ることができない事を君は知っている。*私がもし武器を手に行っているのであれば、それは人を殺した者達の前に立ちはだかる為で、人を殺めるためではない。*私は自分がムスリム一人一人を守る兵士だと思っている。そして、世界の悪全てから彼らを守ることができる力を、神が与えてくれる事を願っている。私の命では遠く及ばないイスラム教の為にではなく、それよりも私の命など無にも等しいシーア派に対してでもなく。違う、違う。．．．何の助けもない、逃げ場のないあの子供達の為に、怯えながら子供を抱きかかえているあの母親の為に、血を流しながら逃げ続けているかわいそうな彼の為に、私は戦う。

*愛しき娘よ、他の者が安らかに眠る為に、私は眠らない、そして眠ってはならない防衛隊に属しているんだ。どうか私の安泰を彼らの安堵の為に犠牲にさせてくれ。娘よ、お前達は私の家で、安全にそして、名誉と共に生活している。誰の助けもないあの娘の為に、全てを、全て

を失ってしまったあの泣きじゃくっている子供の為にはどうすればいいのだろう。だから、お前達は私を彼らの元に行かせてくれ。*どうか行かせて、行かせて、行かせてくれ。私の部隊は全員行ってしまい私だけ残っているのに、どうやってここに留まることができるというのだ。

娘よ、とても疲れている。もう 30 年も眠っていない、しかしもう眠りたくもないんだ。私がふと目を離したとき、あの無力な子供が殺されてはいけないと、瞼を閉じないよう目を見開いている。もしも、怯えているあの児がお前だと、ナルジェスだと、ゼイナブだと、戦場という屠畜場で殺されていく若き者達を息子のホセインだと、レザーだと考えてしまうと、私にどうすれば良いというんだ？ただ、傍観者で、見て見ぬふりをして、何も感じず、商売でもやればと？いや、私はこんな風には生きていけない。

それでは皆に神のご慈悲がありますように』